綾足覚え書

前田利治

綾足の伝記はこれまで殆んど明かにされてきたと思うが、彼の多岐に渉る文芸活動は又多くの対人交渉を持った。夫等の対人交渉の研究は綾足のみならず、他の江戸期の文芸家と呼ばれる人々の場合も未だ不充分と思うのであるが、江戸も中頃になると封建制度下の社会機構も安定し、人々の生活も、文化、経済等の面で、特異な歪をみせながらも、今日的様相を帯びてきている。

江戸中期の一部の文芸家に共通する文人思想は、儒学・国学を基盤にして、又それなりの安定した思想傾向となっている。夫等文人達の趣味性・孤高性の問題にしても、決して単独に存在し得るものでなく、色々な意味で相対的性向としてこれを捕えなければ、針の穴からの愚を犯すことになる。

綾足は中期文人の典型として、秋成と共に語られる所であるが、文人と呼ばれている彼の芸術と生活を対人交渉の中に置いて、それらのいくつかの契機と発展を考察してみよう。

佐久間柳居との絶交

綾足の「草のいほり」は、延享期の紀行に就いて述べた一書である。その中に「その後柳居とたかえることのいできて交りを絶つ」という一条がある。今この言葉をとがめて絶交の前後に於ける綾足と柳居との交渉をさぐり、そこから生ずる綾足の諸問題について考察を加えてみたい。

「草のいほり」は延享四年前後の事について触れている所が多い。柳居とのトラブルもこの四年の秋頃と推定される。絶交の理由については何も記す所が無いので確かな事情を知る事はできない。この件に関する柳居側の資料が無いものかと探していた所が、過日、関口の芭蕉庵の松宇文庫で「在りし世語り」という一本を見る機会があった。この本は既に頴原博士の柳居研究に於いて基本的な資料となっている事は承知していたのだが、一読するに及び、綾足研究にも又加えるものがある事が判った。この本は松露庵烏明の編によるもので旧師烏酔の二十七回忌追善の時にあたり寛政七年出版された。烏酔はいうまでもなく柳居内の筆頭の地位を占め、左明・烏明・百明をはじめ多くの門人を擁して延享・寛延・宝暦・明和の間に多彩な動きを見せた。烏明は性実直でよく師風を

伝えたが、統帥の才に欠け白雄その他有力な門人の離反を招いたと言われている。この本に遅れて寛政十年に「続近世畸人伝」が出版されているのであるが、今日綾足について論考される場合、柳居に於ける「在りし世語り」と同様に基本的資料として珍重される所である。思うに、浮説をも録しながら綾足の才と性を述べる筆者の過剰な表現は「近世叢語」をはじめとし後世の綾足評に決定的な影響を与えたとはいえ、綾足の伝記資料としての価値を滅ずるものではない。今ここで「続近世畸人伝」とそれより三年前に出版された「在りし世語り」中の綾足伝を比較評論し、その全文を紹介する積りはない。が「在りし世語り」が「続近世畸人伝」よりも早く出版されている事に注目すれば足りる。

扨ここで、綾足と柳居の絶交という事に関する「在りし世語り」中の数条を抄出してみよう。

幼なき時より画を好風雅に志を寄せて東都に来り三斛庵を訪ひ、柳居総師見えて語身を願ふといへとも見所ありて請かはす。後には絶交までに及はれたり。

とあるだけでその理由に就いては又何も記する所がない。事実はこれだけである。

「在りし世語り」の筆調から察するに烏明は一統の先祖柳居に破門(?)された綾足には極めて同情的で恐らく絶交の間の理由、背景について知る所があったが綾足の名誉に水を浴びせる非礼を取らなかった思いやりが感取される。それは烏明だけでなく柳居の高弟達との交友にもみられる。即ち延享四年十月刊、秋瓜編「継琵琶」に入集し、又秋瓜との両吟「俳諧角合」が宝暦七年に出版されているし、綾足関係の俳書には、烏酔・門瑟等の句が多く入集し、柳居没後にも交友の時が重ねられているのである。事情は異なるが、芭蕉と路通のトラブルの逆の現象である。路通の場合は、同門間の不評が先に伝えられて芭蕉の勘気を蒙ったのであるが、綾足の場合は、一門の総帥柳居との間のみのトラブルで門弟達との交友は変りなく続けられていると考えてよいだろう。これには色々理由は考えられるが、ここでは柳居がトラブルのあった翌年即ち寛延元年五月に歿した為に、門弟達と柳居との交渉が絶え綾足に関する問題が長く尾を引く時間的余裕も無かったという事を指摘して先へ進もう。

ここで綾足と柳居の交友の大概に触れて置きたい。綾足の側の資料に柳居の名が見えてくるのは紀行「越の雪間」からである。「越の雪間」は延享元年頃の紀行を述べたもので、

柳居はい勢の風雅をしたふて門人其風に帰するもの多し。我流の古雅は曾てとらず。されど其庵りに風人のあつまる日は我もゆきて雅莚の交りをなせば、庵主烏酔、吐花（秋瓜）隔なくかたりきこへぬ

がそれである。「越の雪間」は延享先年（寛保四年）同二年時の事を主に述べたもので、この事から延享元年時には既に二人の交友は始まっている。「在りし世語り」によれば綾足は柳居門人となっているような口調であるが、綾足は「我流の古雅は曾てとらず」とそれを否定しているので、何れとも解し難い。がここに一つの問題がある。それは「越の雪間」及び「草のいほり」他一聯のこれ等の紀行が果たして何時書かれたのかという素朴な疑問で

ある。即ち「我流の古雅は曾てとらず」と啖呵を切ったのは柳居との絶交以前の発言か、それとも以後か。原本の刊記について管見の機会がないが、筆者のみた一転写本「凉袋道中記・全」（仮題）及び綾足の伝記資料から推察するに、その原本には刊記が無いものと思う。綾足は恐らく紀行の途次メモしたものを後日整理執筆したものと考えるが、その日が果して前述の延享二年春から、柳居との確執の日同四年秋までの間に存在するのか、よく判らないのでここでは一応不明とし、柳居入門の件も綾足側の確実な資料が見られない限り速断できないのであろう。この事に執着する理由は既に判読されたと思うが、絶交等というような烈しい対人交渉はその前後で相手の印象評価を極端に変えるという人間感情の常識から、「在りし世語り」の柳居入門に対する綾足の「我流の古雅は曾てとらず」という全く反対の表現の機微に触れてみたかったからである。この問題に関しては再説する機会があると思うのでこれ以上触れない。柳居側の資料に綾足の名が見えるのは、「芭蕉翁同光忌」（柳居編・寛保三年成・延享三年刊）からである。これによって寛保三年時には二人の交渉が始まっている事が知られるのである。

これ等両者の資料から結論できる事は、二人の交友は寛保三年頃から始まり（それ以前の交渉は、綾足の動向から考えられない）翌四年（延享元年）には柳居の俳莚に参加し、高弟達とも親密な交渉を持つまでに至ったと考えられるのである。時に綾足二十五才、柳居四十九才で、親子に相当する年令の隔たりがある。

延享二年以後、綾足は関西に住し本格的な俳諧修行を重ね柳居との直接の交渉は無くなるが、翌延享三年に柳居は門人烏酔と前後して、麦林の本拠伊勢を経て上洛している。此の間、伊勢及び京・難波で柳居・烏酔と旧交を暖め歓談の日を送っている。紀行「梅の便」はこの様子を次のように述べている。

「柳居約したりしかば、いせの杜菱（麦浪・乙由の男）も京に出たりし司鱸又浪花にくたりてあるが来りて度々雅莚をもふくるほとに同調の社友此に莫逆の交りをなす」

ここで関西に於ける綾足の動向について述べなければ右の一節の意味する所が判らないので簡単に触れる。

先に元文三年浪花の野坡に入門した綾足は以後秋田、江戸・秩父に住した。この間の寛保期に柳居との交友が始まる訳であるが、再び関西に舞い戻り、彭城百川に会して麦林に心を寄せ、百川の指示に従って金沢に希因を訪れて発句の姿情を探り、後南下して麦林の祖地伊勢に赴いて梅路に私淑している。野坡門人葛鼠は伊勢派に転じ、号も希因にあやかって都因と改号しているのである。柳居と同調の社友たるゆえんである。

延享四年春、都因の俳諧修行は終り、江戸に帰って浅草金竜山麓に吸露庵を営んで伊勢派の宗匠としての俳諧活動が始まる。江戸俳壇に於ける積極的な進出がこれより行なわれる。春から夏にかけて柳居及びその門弟達との交友は繁く莫逆の交りは尚続いた。夏も終る頃、「伊勢続新百韻」が出版された。

この一書は遂に両者の交渉をしめくくる最後の場になってしまった。この後、須臾の間に二人の信頼の絆は断ち切られた。即ち「伊勢続新百韻」は綾足の古い門人百梅が、伊勢派の古老岸虎か

ら得た杜菱・曾北等伊勢一門の百韻（享保某年成）である。又、元銀十一年伊勢蕉門の先師と仰がれている乙由が、支考等と巻いた百韻一巻「伊勢新百韻」の平明な句風は後の伊勢風の先唱をなすものであり、炭俵、続猿蓑以後の新風提唱の意図をもつものであったようだ。乙由没後の伊勢派俳人にとっては、この「新百韻」は聖典であり指導書であった事が伺えるのであるが、延享四年八月刊の「伊勢続新百韻」は涼袋の序と柳居の跋が棒げられ、前書にあやかって「続」の一字を加えて出版された。前書の如き新風提唱の発意によるものかどうか疑わしいが、江戸伊勢派蕉門の門閥高揚に資した事は明瞭である。この一本の出版をめぐって二人の感情の齟齬は考えられないであろうか。

綾足は又狷介の人と言われている。綾足の生涯を悲劇的な色彩で限どるものは、秋成と共通する烈しい自我主張の個癖であり、容れられぬ強い不満である。亡命の理由がそれであり、又延享期の関西滞留時に於ける九十九庵風之及び暮柳舎希因との確執が又如実にそれを示している。この後の柳居とのトラブルは、全く突然の事件では無く、これ等一聯のトラブル史の中に烈しく生きづいていると言えるだろう。

これ等の事を個条書きにしてみよう。

(一) 延享三年夏　風之と絶交す
(二) 〃　四年春　希因　〃
(三) 〃　四年秋　柳居　〃

全く盛んなる哉、壮なる哉である。凡そ一年の間に三つも大喧嘩をやつのけ絶交しているのである。(一)と(二)の場合にもう少し立ち入ってみよう。

(一)は百川の演出によって野坡門を飛び出して伊勢派に転ずる際のトラブルである。親代りとなって野坡への紹介の労を取った風之にとっては、綾足の変節は亡恩的行動以外の何物でもなかったであろう。若い綾足は

我今風雅を異にしたる。逢ふてかたりなば横さまにあらそひおこりてことごとしかるべし（紀行梅の便）

と分別顔にのべてはいるが、風之の憤懣はしのばれる。

(二) 希因を離れて伊勢に赴き梅路を識り、金沢に向かって難陣する所があった。挑戦を受けた希因は怒って絶交書を綾足へたたきつけたというのが実情である。

前者は全く俳諧そのものから遠い感情の問題に起因する齟齬であるが、後者は句法に於ける難陳という点で異なる。風之とは既に席を分けてはいるが、希因は同調の俳人であり、又短期間ではあったが、綾足の師であった。俊敏の青年俳士はいち早く希因の句法を看取し、心服する所がなかった結果の事である。即ち

我金城にありしとき麦水と云者と俳諧したる中に
すすき分れはあれにちかみち

としたるを希因筆を加へて「そこにちかみち」としたる金城の風士みなよろこびそこの詞妙也と云。我も実とは思ひ過しがことし梅路に一棒を受て風雅の境をしるに及んであれにもあらずそこにもあらずかかる趣向の句ならんには

すすき分れはちか道か出る

とすべき。出るの一字ころやすくはた句勢の円なるや。又其

すかたのやすらかなるや。全く麦林の雅境也としるより、金城の句のすがたいとこちたく、語勢のまとかならざるはた句毎にからびたる味のすくなき、我希因がために久しくまとひぬるは一時にことの定りたれば……云々

とある。これは伊勢派の句法を要領よく説明して妙である。要するに麦林に転じて数年の間に、一かどの俳人としての自信と衿持を持つに至っている。勿論青年の客気と生得の烈しい自己主張が手つだっているとは思うが。

両者の経験と自負は、直接の原因が何であれ種々の点で相異していた。綾足には、柳居を「五色墨」の一人で、多くの門流を統べている老俳人としての相応の評価を持ち合わせていても、夫れ以上に己を恃む若さと才気を自覚していたに違いあるまい。吸露庵結庵後の柳居との日常の交友や、「伊勢続百韻」を出版する間に於ける柳居の大家意識や処生の態度は、新進の青年俳人凉袋の我慢できぬ所であったろう。更に摂取したばかりの伊勢の新風は、柳居の古風に対して反撥するものがあったと思うのである。同じ年の始めに、伊勢派俳人の第一人者と評されていた暮柳舎希因に対してさえ、烈しい自我を投げかける程の闘争的個性は、柳居に対しても臆する事なく向けられた。綾足には神風館直系を自認する矜持もあり柳居に対する対抗意識もあったろう。希因の句法をとがめ、柳居に対した江戸伊勢派の正系を名乗り出たと言う筋書を設定するのに余りにも窄ち過ぎるかも知れないが、種々臆測させるものがあるのだ。「我流の古雅はかってとらず」という紀行「越の雪間」の言葉が絶交以前の言葉であるなら、柳居に寄せた信頼の度は初から薄いものと考えられるし、絶交後の言葉であるなら、明に対抗の意志を表明していると考えてよい。

何れにしても柳居との絶交が意味するものは、微視的には延享期には延享期の闘争的処生をしのばせ、巨視的には、後の片歌の興起の祖として俳諧の宝の山を出ていったあの烈しい怒り型の自己主張の片鱗をしのばせるに充分である。綾足の五十六年の華やかな生涯を支えるあの強烈な超俗意識が、仮に生得の性に根ざすものであったにしても、芸術の属性たる円満なヒューマニティとは各異る円を画いて、才気は又夫等の各に分断されて、全的な造型への契機たり得なかった事は惜しまれる。天明期の文人意識に共通な趣味性を越えた所に、綾足の自我と才気と不満が素顔をのぞかせている。換言するならば八つあたりのエピキュリアンである。

絶交の翌年寛延元年五月、柳居は五十四年の生涯を江戸に終えた。絶交の結末（?）はここにピリオドを打つことになる。吸露庵主凉袋の俳諧活動は華々しく江戸俳壇に繰り拡げられた。多くの俳書がそれを物語る。が才人綾足は過剰な己の才気を持てあますかの如く、寛延二年絵画修行を志して三度の西国行となるのである。

「在りし世語り」の作者烏明は、綾足と面識があったどうか知る由もないが、綾足の伝記を敍述しながら最後に次のように結語している。

「しかし人は悪くいはるるも名をなすべき者なればさのみ憎むべきにもあらず。人並なれば悪くもいひ残す人もなしとやいはむ」　同情しているのか、賞しているのか、あるいは識っている

のか。それは烏明の実直な性が明にしてくれるであろう。

楫取魚彦との交渉

宝暦期多くの門人を集め東西の富を二分する程の俳諧的勢力を築きながら、十三年綾足は真淵の門人となり、片歌唱道につとめる。寛延・宝暦の間凡そ十五年の宗匠生活を拋ってまで国学や片歌へ転じた動機については従来色々と指摘されている。

成程宝暦期は真淵の学が広く流行していたが、綾足の国学づく直接の契機をここに求める事は、大河を流されていく小舟に似て、余りにもおおまかな把握である。又綾足の放浪癖や、烈しい自己主張の個性に求める事も、その限りでは妥当であっても微視的である。では他にもっと直接的な契機は?。それを彼の画俳両面の門人である楫取魚彦（俳号青藍）との交友に求めたいと思う。

魚彦は真淵門の高弟として、国学の造詣が深かった事は申すまでもなく、その他俳諧、和歌絵画をよくした。二人の交渉が始まるのは、一説に宝暦二年頃と推定されているが、宝暦十年と考えてよかろう。この事について少し触れてみる。

綾足関係の俳書に青藍の句が初めて見えるのは、管見の範囲では宝暦十年九月刊の「俳諧連理香初帖」からで、以後の本にはよくその名を見る事ができる。又刊記不明の「佐原日記」に

卯月すえの十日破了なるものといて香取の浦佐原てふ所にくたる。さるは其所に青藍ぬしいまするがまねきたまへるなり。この人春の頃武城にととまり居て我に画なんまなへるに……、……

とあるけれども何時の事だか判らない。然し綾足と同道した破了なる者は、宝暦十年の歳且帳「絵の山影」によって、前号を一茶坊と称し綾足が破了という名を贈って改名させた事を知る事が出来る。

前の年九年に成った「続百恋集」に破了の名が見えるので、破了の改名はこの年九年に行われて翌十年の「絵の山影」にその旨を記したと考えられる。又破了の前号一茶坊の名は、宝暦八年以前の俳書に見えない事から、青藍との交渉はこの十年から始まったと考えてよかろう。

魚彦の俳諧暦については木村捨三氏の報告がある。それによれば延享二年版の豊寥和撰の「俳諧職人尽」に青藍の号で入集しているので、此の時二十二才の青年青藍は、江戸座の俳人であったようだ。青藍の綾足入門を宝暦十年とすれば、初心の俳人ではなく長い俳歴を持つ人として綾足の門人としての処遇にも他の門人と異なる丁重さが感取される。時に青藍三十八才、綾足四十二才の年時ある。

魚彦の県居入門は「門人録」によると宝暦九年正月とあるから、綾足の県居入門より四年程早かった。青藍は真淵門にあって国学、歌道の研鑽の他、綾足については俳諧、絵画を学んでの二筋道を歩いていた事になる。真淵門の人となった魚彦は、その翌十年十月には、師のために藤原維寧と共に「万葉集別記」の校正

をした程の精進振りであった。又世故に長じていた所から真淵の内輪の相談にも与かったことが「県居書翰続編」で知られ、師の信任を日ならずして得ている事が判る。これに劣らず綾足も又青藍を重用し、入門早々の宝暦十年に出版した最初の画業「寒葉斎画譜」を加藤千蔭等と共に編集させている程だ。綾足と加藤千蔭との交渉については詳述する余裕が無いが、「寒葉斎画譜」以外の交渉は現在の所知る事ができない。千蔭は魚彦と同じ真淵門の俊秀であった。川喜多真彦の書いた「近世三十六家集略伝」によれば、

「当時江戸にして、千蔭、春海、美樹、魚彦の四翁を、県居の四天王と称す。云々」

とあり、宝暦十年、綾足四十二才、魚彦三十八才、千蔭は三十四才である。これ等二人の国学者を門下生とした綾足は、直接間接に国学への関心を深めていった事は想像できよう。

綾足は過去二回の長崎行を経験し、画技はそのつど錬磨されて宝暦十年頃は絵画の門人もいた事は魚彦、千蔭の事で判る。又此の期の紀行によれば、再三目を病んで画からのく心境を披瀝している。宝暦七年には殆んど失明の状態で江戸汐留の中津候の藩邸に移り病を養っている。俳諧にあっては、伊勢派の一句立をもって多くの門弟を集め、何等不自由の無い生活を送ってはいるものの物心両面のマンネリズムの気配が察せられなくもない。

一方国学は魚彦や千蔭によって身近かな存在となる時、四十も半ばに達した綾足の心理は微妙に動いた。性来の強い自我主張癖は再び頭をもたげ、一気に国学への傾斜を下りていったと察せられる。が真淵の後塵を拝する事を潔しとせず、片歌興起の祖となる事に生涯をかけたと思うのである。

「続近世畸人伝」は綾足の述懐として、

いつしか俳諧は無用のあだ言なりと知りたるよりやめぬ。片歌の用いられぬは覚悟なれば、画といふ業を立てて口をのります。人は用いずとも片歌の興起は我なり。是がため俳諧といふ宝の山を出でて片歌といふ淵に身を投ず

と綾足の独白を伝えているが、些か誇張があるにしても、この辺の事情を説明するものであろう。

このような背景のもとに、魚彦との出会いを考えるならば、かって延享二年、俳人綾足が百川と交渉を生ずる事によって、文人としての洗礼を受けた事にも劣らない程の大きな伝記的意義を持つ事が理解される。

魚彦は国学を以て中津候奥平昌鹿に仕えている。「摂取翁小伝」によれば、「真淵翁没られし後は、翁に随い学ぶもの益おほく、二百人にあまりぬとか」と記し、次で「大名たちには、奥平大膳太夫殿親子、酒井雅楽頭殿、戸田宋女正殿、松平左京亮殿なとおはししか、中にも中津の候なむ月俸給はりて、ことに親しくめしまつはし給ける」と見へている。これ等の事から中津候との交渉が始まるのは、真淵の没した明和六年以降の事で、明和年末から安永の初めと考えられる。中津候父子とは即ち、昌鹿と世子昌男の事であろう。

綾足は魚彦より先即ち宝暦二年より昌鹿の父昌敦と交渉を持っている。綾足の母のもだしがたきすすめで絵を以て仕え、二回に渉る長崎への絵画修行は、すべて昌敦の命によるものであった。

宝暦八年昌敦は没し、昌鹿が遺領を継ぐ。綾足と昌鹿との交渉は片歌以後の綾足の著書に「中津の君」と出ている人である。恐らく昌鹿との交渉は安永三年綾足が没するまで続けられたものと考えてよいだろう。魚彦が中津候と交渉を持つようになったのも綾足を介したものか。

明和四年の関西移住について

宝暦十三年以後、片歌の精力的な唱道が続けられる。関東一円及び信濃地方への旅行は繰り返されたが、綾足の期待と努力に反して門人は集まらなかった。一部に信者を得たのみで、逆に批難の声があがってくる始末であった。明和二年「華月一夜論」が出て片歌に対する批難は強まるばかりであった。

江戸に於いて、国学を以て真淵以上には出られず、片歌を以てしても志を得ないとあっては、綾足の焦燥は深まる一方である。明和初年、二年、三年と矢つぎばやの出版はそれを物語る。このいう背景のもとに「三野日記」は書かれた。

この日記は刊記不明であるが、明和三年に成るものである事は確かである。江戸を引き払って関西移住を決意し、かねて親しくしている地方の門人達にいとまごいの旅行を日記風に記録したものである。

筆者がこの「三野日記」を提出して結論としたい事は次の二点である。即ち、

㈠ 関西移住は明和四年春であった事。

㈡ 愛児年外沙弥を失った事が移住を決意する理由の一つであった事。

先ず㈠について考察を進めよう。

綾足の関西移住に関する他の資料としては、明和五年刊の「西山物語」の序がある。「客歳遊手平安、下帷講授。」から明和四年の上京を推定している。これが唯一の資料であった。今ここに綾足自身が記録した資料を加える事になる。

かねてからはと思ひたてることのあるに来年のむつきばかりはめこさへつれて都にまうのぼるべきなり

とあるから、明和三年に移住の決意があって、四年の正月早々出発する予定であったようだ。浅草の庵も人に譲り、家族を具してまでの決意をさせた理由は一体何であろうか。

㈡に触れる事によってそのなぞは解明できる。綾足には年外沙弥という一子があって、その子を此の年の四月失っている事だ。次の歌は哀切の調を伝えて優れている。

中津の君に奉る歌并短歌一首

かかなべてわが世をよめば、あづさゆみ、いそぢへにけり、たから子は、年の四とせに、たまのをの、命たえぬれ、世の中は、かくぞありける、うつそみはかくぞはかなき、けふのごとおもひさかえて、蟹じもの穴にはてめやと、めことぬも　たづさえ出て　春さらば　よしのの山の、さくら花、折ても見せむ。秋さらばたかまど野べの、さの萩を、すりても着せね、か

くしてぞ　たのしからむと、かりほなすいほりも売りて、家なしや　家はなくても、よしえやし里はなくとも、草枕旅に死なん（略）

と子に寄せる思慕は遂に旅に出ることによって無常迅速の境をたいし、自らを慰めようと決意するに至っている。又他の条にも、「五日ことし卯月ばかり、子なむうしなへることを、今も忘するる時なく侍る」とか、各所に亡くした子供に対す愛着が記されている。さすがに気強い綾足も、我が一人子の死に対しては深い傷心をかくし得ず、その痛手は深く文脈に刻まれている。

わきもはじめて孕めるに、をとこならば必ず仏のみ子に奉らんとうけひけるに、宝暦十あまりの三のとし、葉月中の三日、時正の日のはじめのあかつき、男とて平かにあれ出でたり。頭おろし給ふべき師には、かねて洞水禅師なむたのみまゐらせし、さて緑子の名はかのおもひ得しはじめより年外沙弥となむとなへる。同じ年の神無月朔日、戒うくる時によみて与ふる片うた一トくさ

むかしより釈迦のみまごぞ吾子となおぼしそ

と綾足を有頂天にさせた子供であった。片歌に対する非難に抗すべき気力は、愛児の死から受けた打撃によって、崩れ去てっていこうとしている。

予定の明和四年正月の出発は、三野旅行の途次持病を発して延期されているようだ。これは明和四年一月末に出版された「片歌旧宜集」に跋を与えている事で判る。では明和四年は何日頃かと云う事になると、決定的な資料を知らないので明かにできないが、同四年三月に出版された「百夜問答二編」に序も跋も無く、それ以後綾足の著作活動は一応四年末まで空白と考えられるので、春頃と考えてよかろう。

あらゆる意味で綾足の生活がゆきづまった明和三年、愛児の死が直接の契機となっての関西行と考えてよかろう。が然し明和五年になると彼の著作活動は旧にも増して活発になっている。

尚、綾足と秋成の面語の年を、明和三年、四年、七年と諸説があるが、三年説は今まで述べてきた理由で成立し得ない。綾足の此の期の関西滞在は明和七年十月までであるから、四年説、七年説いずれも棄てられない。四年と七年の両説については又他日を期したい。

（本稿は昭和三十四年度春季近世文学学会で発表したものである。）